

# シリーズ 残土の正体



早川町の中部横断自動車道の残土置き場山頂で稼働するショベルカーセレンの入った残土が早川沿いにピラミッドのように積まれている

大鹿村ではリニア新幹線の南アルプストネルの掘削に伴い、村内各地に残土が置かれる予定です。

「法に沿っている」、「大丈夫だ」と国も県も村も事業者も言い続けた結果、昨年末、小渋線はJR東海の工事によって崩落しました。県も事業者も崩落を「不可抗力だ」と言わんばかりです。

さて、残土に限って安全ということがあるのでしょうか。

各地の残土の実情を知りつつ、南アルプスの自然環境を守り、大鹿村で安心して暮らしていくために何ができるのかを考えます。

## ●第1回

「君津市が残土条例を作ったわけ」現地レポート

✓日時 2018年5月14日(月) 19:15~20:45

✓場所 大鹿村大河原交流センター大広間

内容

現地報告 前島久美さん(南アルプスから学ぶ会)ほか併せて「大鹿残土置き場の今とこれから」について現状を共有します

## ●第2回

「河川敷・谷埋め盛り土は安全か？」

✓日時 5月27日(日) 14:00~16:00

✓場所 大河原交流センター大広間

内容

講演 桂川雅信さん(技術士・環境カウンセラー、中川村在住の「水と土」の専門家)

谷埋め盛り土のこれまでの研究成果とJR東海の資料をもとに村内盛り土の課題についてわかりやすく解説します

\*資料代 2回通しで500円

主催 南アルプスから学ぶ会

TEL 0265-39-2067

協賛 大鹿の十年先を変える会、伊那谷・残土問題連絡協議会

千葉県君津市へ「残土条例について」見識を広めるため視察に行ってきました。

今回は、千葉県の山砂の掘削と産廃の実態、条例改訂によって何が変わったかをお伝えします。

建設ラッシュの高度経済成長期(1945年頃から)から君津市の良質な山砂は骨材(コンクリートの原料)として重宝がられ、開発が進む都内を中心に全国へ運搬され始めました。今でも東京の建設現場からでたズリは海路で効率的に運べる千葉県に多く持ち込まれています。ある時期、君津市内はダンプ街道となり、粉塵由来の健康被害や騒音、交通事故など住民に非常に深刻な被害がでました。それらの公害問題は地元住民の日常的な監視や研究者や行政との連携等によって改善されてきましたが、君津市の山砂と産廃を巡る業者と地元住民との日常定期的な攻防は続いており、3.11以降新たな懸念事項として低放射能汚染がある残土の持ち込みなどが加わりました。それらに規制をかける為に君津市がどのように条例改正をしたのでしょうか。

一見、大鹿村の問題とは異なる事例のように思えますが、法令の現状や業者の体質、行政の対応など参考になるかと思えます。(前島久美)

